

「両岸に 笑顔ふりまく  
やかた舟」

やかた舟

野崎参りは、江戸時代の中頃に慈眼寺（野崎観音）で復興の一つとして営まれた、旧暦4月1日から10日までの無縁経法要や、秘仏の十一面観音の特別開帳など、参詣者の誘致に努めたことをきっかけとして始まったと言われています。宝永年間（1704～1710）ごろは庶民の生活も豊かになり、大坂から日帰りでも参詣できたことから、次第に盛んになったようです。近松門左衛門の浄瑠璃「女殺油地獄」にもその参詣の様子が出されています。

参詣路は、大坂天満の八軒家浜から寝屋川をさかのぼり角堂浜（現在の住道駅北側）に向かいます。ここで船を乗り換え観音井路（現谷田川）に入り、さらに東へと向かい観音浜へと至ります。ここで船を降り、あとは徒歩で旧四条小学校の北側の道を通り、親鸞の直弟子の唯信が建立した専応寺の太子堂を参詣した後、野崎観音へと至るものでした。

野崎参りは、東海林太郎の「野崎小唄」にもみられるように、やかた舟など船で参詣

するのが主でしたが、寝屋川の堤道を徒歩で参詣する人々も多くいました。船でいく人々、堤道を歩く人々のその道中の様子は、上方落語「野崎詣り」の「ふり売り喧嘩」が有名ですが、享和元年（1801）に刊行された「河内名所図会」では笑顔で楽しく参詣している人々が描かれており、当時の生き生きとした様子をうかがうことができます。



野崎参りの絵図〔「河内名所図絵」享和元年（1801）刊行〕